

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K10	氏名	北中 啓勝
研究主題 —副主題—	社会的事象の意味を捉えさせるための小学校社会科授業に関する研究 —問題解決的な学習への協働型学習の位置付けと教員による足場かけによって—		
所属校	新宿区立四谷小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容									
I 研究の目的	本研究は、小学校社会科の学習環境について、「問題解決的な学習への協働型学習の位置付け」と「教員による足場かけ」の側面から設計・実践・分析し、より多くの児童に社会的事象の意味を捉えさせる上で有効な社会科授業の在り方を提案するものである。									
II 研究の方法	<p>(1) 研究の流れ</p> <p>本研究ではデザイン実験の手法を用いた。デザイン実験とは、「過去の理論的成果に基づいて、ある特定の教育現場において学習環境を設計（デザイン）し、実践の中でその設計を見直して修正を繰り返し、より現実的で洗練された学習環境の形成を目指すもの」関口（2013）である。具体的には以下の流れで研究を進めた。</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>① 学習環境の設計</td> </tr> <tr> <td>・「協働型学習の位置付け」「教員による足場かけ」の二点に焦点を当て学習環境を設計する。</td> </tr> <tr> <td>② 設計した学習環境に基づき 1 次検証授業の実施</td> </tr> <tr> <td>・対象：都内公立小学校 第 5 学年 1～3 組 95 名 単元：「水産業の盛んな焼津市」</td> </tr> <tr> <td>③ 1 次検証授業の分析</td> </tr> <tr> <td>・実践を分析し 2 次検証授業に向けた修正点を明らかにする。分析は以下の三つの方法を用いる。 【分析 1 児童の対話の分析】【分析 2 意識調査の分析】【分析 3 記述内容の分析】</td> </tr> <tr> <td>④ 分析結果に基づき学習環境を再設計、2 次検証授業の実施と分析</td> </tr> <tr> <td>・1 次検証授業の分析結果を基にして学習環境を再設計する。 ・修正を加えた上で 2 次検証授業を実施し、実践後に分析と研究のまとめを行う。 ・対象：都内公立小学校 第 5 学年 1 組 31 名 単元：「自動車工業の盛んな豊田市」</td> </tr> </table> <p>(2) 設計した学習環境について</p> <p>学習環境は、「協働型学習の位置付け」と「教員による足場かけ」の二点に焦点を当て設計した。</p> <p>① 本研究でいう「協働型学習」とは</p> <p>協働型学習は、三宅が提唱する協調学習における知識構成型ジグソー法をベースとした。三宅らが学校と連携して行ってきた実践の特徴を整理し、小学校社会科の特性を踏まえて以下の三点の視点を加えた。この研究でいう協働型学習とは、この三つの視点を加えて展開したものとする。</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;"> <p>本研究で新たに加えた三つの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ○単元の中に知識構成型ジグソー法を組み込む。 ○社会科の特性を生かし、問いと視点は児童と共に設定する。 ○児童間の学び合いに合わせ、外部施設・人材との協働という視点を盛り込む。 </td> </tr> </table> <p>② 「教員による足場かけ」の内容について</p> <p>足場かけ（scaffolding）とは、「子供の目標となる行動を達成するために大人が指示したり質問したりさまざまなプロンプトを与えるなどの援助をするこ</p>	① 学習環境の設計	・「協働型学習の位置付け」「教員による足場かけ」の二点に焦点を当て学習環境を設計する。	② 設計した学習環境に基づき 1 次検証授業の実施	・対象：都内公立小学校 第 5 学年 1～3 組 95 名 単元：「水産業の盛んな焼津市」	③ 1 次検証授業の分析	・実践を分析し 2 次検証授業に向けた修正点を明らかにする。分析は以下の三つの方法を用いる。 【分析 1 児童の対話の分析】【分析 2 意識調査の分析】【分析 3 記述内容の分析】	④ 分析結果に基づき学習環境を再設計、2 次検証授業の実施と分析	・1 次検証授業の分析結果を基にして学習環境を再設計する。 ・修正を加えた上で 2 次検証授業を実施し、実践後に分析と研究のまとめを行う。 ・対象：都内公立小学校 第 5 学年 1 組 31 名 単元：「自動車工業の盛んな豊田市」	<p>本研究で新たに加えた三つの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ○単元の中に知識構成型ジグソー法を組み込む。 ○社会科の特性を生かし、問いと視点は児童と共に設定する。 ○児童間の学び合いに合わせ、外部施設・人材との協働という視点を盛り込む。
① 学習環境の設計										
・「協働型学習の位置付け」「教員による足場かけ」の二点に焦点を当て学習環境を設計する。										
② 設計した学習環境に基づき 1 次検証授業の実施										
・対象：都内公立小学校 第 5 学年 1～3 組 95 名 単元：「水産業の盛んな焼津市」										
③ 1 次検証授業の分析										
・実践を分析し 2 次検証授業に向けた修正点を明らかにする。分析は以下の三つの方法を用いる。 【分析 1 児童の対話の分析】【分析 2 意識調査の分析】【分析 3 記述内容の分析】										
④ 分析結果に基づき学習環境を再設計、2 次検証授業の実施と分析										
・1 次検証授業の分析結果を基にして学習環境を再設計する。 ・修正を加えた上で 2 次検証授業を実施し、実践後に分析と研究のまとめを行う。 ・対象：都内公立小学校 第 5 学年 1 組 31 名 単元：「自動車工業の盛んな豊田市」										
<p>本研究で新たに加えた三つの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ○単元の中に知識構成型ジグソー法を組み込む。 ○社会科の特性を生かし、問いと視点は児童と共に設定する。 ○児童間の学び合いに合わせ、外部施設・人材との協働という視点を盛り込む。 										

	<p>と」(藤野、2010) がある。研究では、「技能面の足場かけ」と「思考操作を助ける足場かけ」の二点に焦点を当てた。</p>
<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>検証授業を「児童の対話の分析」「意識調査の分析」「記述内容の分析」の三つの方法で分析し、「協働型学習の位置付け」と「教員による足場かけ」の有効性や課題点を明らかにした。</p> <p>(1) 児童の対話の分析から</p> <p>児童の対話の分析は、エキスパートグループからジグソーグループに戻り、調べて分かったことや考えたことを意見交流する場面の対話を取り上げた。1次検証授業の児童のやり取りを分析した結果、「事実の伝達に終始している児童が多い」「事実と考えや混在し話合いがかみ合わない」「話合いの型を意識しすぎる傾向がある」等の課題が明らかになった。2次検証授業では修正を加えてジグソー活動を実施した。その結果、1次検証授業に比べ他者の考えを聞きながら各自が自分の考えを修正したり、新たな考えを取り入れたりしている児童が増えていることが、児童の対話の分析から明らかになった。</p> <p>(2) 意識調査の分析から</p> <p>意識調査では、満足度と理解度の二点について調査した。主となる二つの質問に関して、否定的な回答をした児童の理由を分析し、2次検証授業に向けた課題点を明らかにした。</p> <p>意識調査において「授業を楽しめなかった」あるいは「学習問題に対するまとめをよく書けなかった」等、否定的な回答をした児童の理由を見ると、「考え方やまとめ方が分からない」とする児童が多くいた。このことから、1次検証授業で提示した「足場かけ」資料が一部の児童にとって難しい内容になっていたことが分かる。2次検証授業では、より分かりやすくするために説明的な内容を少なくして具体例を多く盛り込むなど、工夫を加えて実施した。</p> <p>(3) 記述内容の分析から</p> <p>評価基準表に基づいて児童の記述を分析し、理解の割合を数値化した。分析対象は学習問題に対するまとめの文章である。</p> <p>分析では、B基準以上の割合が90%を超えていた。記述分析の結果と意識調査の結果を関連させて見ると、「協働型学習の位置付け」と「教員による足場かけ」の二つの手だては、本研究の目的であるより多くの児童に社会的事象の意味を捉えさせることについて一定の成果を上げたと言える。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>「協働型学習の位置付け」と「教員による足場かけ」は、社会的事象の特色や意味を捉えさせる上で、以下の点において有効であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 単元の中に知識構成型ジグソー法を位置付けたことで、学び合いの場面が従来の実践に比べて大幅に増え、多くの児童が社会的事象の意味を理解することにつながった。 ・ 問題に対する予想から視点を整理することを知識構成型ジグソー法に組み込んだことで、児童自身の「問いを解決したい」という思いが、学習の動機付けとなり学び合いを活発なものにした。 ・ デジタルネットワークを活用した外部人材との協働は追究活動の幅を広げた。また、双方向のやり取りが可能となり、児童は主体的に情報収集を行った。 ・ 「教師による足場かけ」により、児童間の学び合いは学習方法を教え合うことよりも、収集した情報の内容を吟味したり、問いに対する考えを話し合ったりするなど内容面に焦点化された。